

# マグノリアの木

宮澤賢治

青空文庫



霧がじめじめ降っていた。

諒安は、その霧の底をひとり、険しい山谷の、刻みを渉って行きました。沓の底を半分踏み抜いてしまひながらそのいちばん高い処からいちばん暗い深いところへまたその谷の底から霧に吸ひこまれた次の峯へと一生けんめい伝って行きました。

もしもほんの少しのはり合で霧を泳いで行くことができたら一つの峯から次の巖へずいぶん雑作もなく行けるのだが私はやっぱりこの意地悪い大きな彫刻の表面に沿ってけわしい処ではからだは燃えるようになり少しの平らなところではほっと息をつきながら地面を這わなければならぬと諒安は思いました。まっただけの全く峯にはまっ黒のガツガツした巖が冷たい霧を吹いてそらうそぶき折角いっしんに登って行つてもまるでもよるべもなくさびしいのでした。

それから谷の深い処には細かなうすぐろい灌木がぎっしり生えて光を通すことさえも慳貪そうに見えました。

それでも諒安は次から次とそのひどい刻みをひとりわたって行きました。何べんも何べんも霧がふつと明るくなりまたうすくらくらくなりました。

けれども光は淡く白く痛く、いつまでたつても夜にならないようでした。

つやつや光る童の髻のいちめん生えた少しのなだらに來たとき諒安はからだを投げるようにしてとろとろ睡つてしまいました。

(これがお前の世界なのだよ、お前に丁度あたり前の世界なのだよ。それよりもつとほんとうはこれがお前の中の景色なのだよ。)

誰かが、或いは諒安自身が、耳の近くで何べんも斯う叫んでいました。

(そうです。そうです。そうですとも。いかにも私の景色です。私なのです。だから仕方がないのです。) 諒安はうとうと斯う返事しました。

(これはこれ

まじ こだち  
惑う木立の

中ならず

しのびをならう

春の道場)

どこからかこんな声はつきり聞えて來ました。諒安は眼をひらきました。霧がからだにつめたく浸み込むのでした。

まったく  
全く霧は白く痛く竜の髯の青い傾斜はその中にぼんやりかすんで行きました。諒安は  
とつととかけ下りました。

そしてたちまち一本の灌木に足をつかまれて投げ出すように倒れました。

諒安はにが笑いをしながら起きあがりました。

いきなり険しい灌木の崖が目の前に出ました。

諒安はそのくろもじの枝にとりついでのぼりました。くろもじはかすかな匂を霧に送り  
霧は俄かに乳いろの柔らかなやさしいものを諒安によこしました。

諒安はよじのぼりながら笑いました。

その時霧は大へん陰気になりました。そこで諒安は霧にそのかすかな笑いを投げました。  
そこで霧はさつと明るくなりました。

そして諒安はどうとう一つの平らかな枯草の頂上に立ちました。

そこは少し黄金いろでほつとあたたかなような気がしました。

諒安は自分のからだから少しの汗の匂いが細い糸のようになって霧の中へ騰つて行くの  
を思いました。その汗という考から一疋の立派な黒い馬がひらつと躍り出して霧の中へ消  
えて行きました。

霧が俄かにゆれました。そして諒安はそらいつぱいにきんきん光つて漂う琥珀の子のようなものを見ました。それはさつと琥珀から黄金に変わりまた新鮮な緑に遷つてまるで雨よりも滋く降つて来るのでした。

いつか諒安の影がうすくかれ草の上に落ちていました。一きれのいいかおりがきらつと光つて霧とその琥珀との浮遊の中を過ぎて行きました。

と思うと俄かにぱつとあたりが黄金に変わりました。

霧が融けたのでした。太陽は磨きたての藍銅鉞のそらに液体のようにゆらめいてかかり融けのこりの霧はまぶしく蟬のように谷のあちこちに澱みます。

（ああこんなけわしいひどいところを私は渡つて来たのだな。けれども何というこの立派さだろう。そしてはてな、あれは。）

諒安は眼を疑いました。そのいちめんの山谷の刻みにいちめんまっ白にマグノリアの花が咲いているのでした。その日のあたるところは銀と見え陰になるところは雪のきれと思われたのです。

（けわしくも刻むところの峯々にいま咲きそむるマグノリアかも。）斯う云う声はどこからかはつきり聞えて来ました。諒安は心も明るくあたりを見まわしました。

すぐ向うに一本の大きなほおの木がありました。その下に二人の子供が幹を間にして立っているのです。

（ああさつきから歌っていたのはあの子供らだ。けれどもあれはどうもただの子供らではないぞ。） 諒安はよくそつちを見ました。

その子供らは羅をつけ瓔珞をかざり日光に光り、すべて断食のあけがたの夢のようでした。ところがさつきの歌はその子供らでもないようでした。それは一人の子供がさつきよりずうつと細い声でマグノリアの木の梢を見あげながら歌い出したからです。

「サンタ、マグノリア、

枝にいつぱいひかるはなんぞ。」

向う側の子が答えました。

「天に飛びたつ銀の鳩。」

こちらの子がまたうたいました。

「セント、マグノリア、

枝にいつぱいひかるはなんぞ。」

「天からおりた天の鳩。」

諒安はしずかに進んで行きました。

「マгноリアの木は寂靜印です。ここはどこですか。」

「私たちにはわかりません。」一人の子がつつましく賢い眼をあげながら答えました。

「そうです、マгноリアの木は寂靜印です。」

強いはつきりした声が諒安のうしろでしました。諒安は急いで振り向きました。子供らと同じなりをした丁度諒安と同じくらいの人があつすぐに立ってわらっていました。

「あなたですか、さつきから霧の中やらで歌いになった方は。」

「ええ、私です。またあなたです。なぜなら私というものもまたあなたが感じているのですから。」

「そうです、ありがとうございます、私です、またあなたです。なぜなら私というものもまたあなたの中にあるのですから。」

その人は笑いました。諒安と二人ははじめて軽く礼をしました。

「ほんとうにここは平らですね。」諒安はうしろの方のうつくしい黄金の草の高原を見ながら云いました。その人は笑いました。



「ええ、平らです、けれどもこの平らかさはけわしきに対<sup>たい</sup>する平らさです。ほんとうの平らさではありません。」

「そうです。それは私がけわしい山谷を渡<sup>わた</sup>つたから平らなのです。」

「ごらんさい、そのけわしい山谷にいまいちめにマグノリアが咲<sup>さ</sup>いています。」

「ええ、ありがとう、ですからマグノリアの木は寂<sup>じやく</sup>静<sup>じよう</sup>です。あの花びらは天の山羊<sup>やぎ</sup>の

乳<sup>ちち</sup>よりしめやかです。あのかおりは覚<sup>かく</sup>者<sup>しや</sup>たちの尊<sup>とう</sup>い偈<sup>げ</sup>を人<sup>お</sup>に送<sup>おく</sup>ります。」

「それはみんな善<sup>ぜん</sup>です。」

「誰<sup>だれ</sup>の善<sup>ぜん</sup>ですか。」 諒<sup>りやう</sup>安<sup>あん</sup>はも一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>その美<sup>うつく</sup>しい黄金<sup>おうごん</sup>の高原<sup>こうげん</sup>とけわしい山谷<sup>さんこ</sup>の刻<sup>きき</sup>みの中<sup>なか</sup>のマグ

ノリアとを見ながらたずねました。

「覚<sup>かく</sup>者<sup>しや</sup>の善<sup>ぜん</sup>です。」 その人<sup>ひと</sup>の影<sup>かげ</sup>は紫<sup>むらさき</sup>いろで透<sup>とう</sup>明<sup>めい</sup>に草<sup>くさ</sup>に落<sup>お</sup>ちていました。

「そうです、そしてまた私<sup>わたし</sup>どもの善<sup>ぜん</sup>です。覚<sup>かく</sup>者<sup>しや</sup>の善<sup>ぜん</sup>は絶<sup>ぜつ</sup>対<sup>たい</sup>です。それはマグノリアの木

にもあらわれ、けわしい峯<sup>みね</sup>のつめたい巖<sup>いわ</sup>にもあらわれ、谷<sup>や</sup>の暗<sup>くら</sup>い密<sup>みつ</sup>林<sup>りん</sup>もこの河<sup>かわ</sup>がずうつ

と流<sup>なが</sup>れて行<sup>い</sup>つて氾<sup>はん</sup>濫<sup>らん</sup>をするあたり<sup>あたり</sup>の度<sup>たび</sup>々<sup>たび</sup>の革<sup>かく</sup>命<sup>めい</sup>や饑<sup>き</sup>饉<sup>きん</sup>や疫<sup>やく</sup>病<sup>びよう</sup>やみん<sup>みん</sup>な覚<sup>かく</sup>者<sup>しや</sup>の善<sup>ぜん</sup>

です。けれどもここではマグノリアの木が覚<sup>かく</sup>者<sup>しや</sup>の善<sup>ぜん</sup>でまた私<sup>わたし</sup>どもの善<sup>ぜん</sup>です。」

諒<sup>りやう</sup>安<sup>あん</sup>とその人<sup>ひと</sup>と二人<sup>ふたり</sup>はまた恭<sup>うやうや</sup>しく礼<sup>れい</sup>をしました。



# 青空文庫情報

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日発行改訂新版

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月発行

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年1月31日公開

2008年8月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# マグノリアの木

宮澤賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>